



ごみ問題から考える 自然と調和した平等な社会とは

レティシア・ドス・ムチャンゴス (Leticia dos Muchangos)

国連大学 サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) JSPS - UNU ポスドクフェロー

自分が捨てたごみはどこへ行くのか

私はUNU-IASで「廃棄物の管理」について「持続可能な開発のための教育 (ESD)」と「持続可能な開発のためのガバナンス (GSD)」という2つのプロジェクトに所属して研究しています。なかでも、ごみの収集といった廃棄物に関する教育やキャンペーンを行う際、ジェンダーや地域社会の特性をどう活かすかが大きな研究課題です。

私が故郷モザンビークで大学生だった頃、路上に放置されたごみ問題が国内で注目を集めていました。収集されたごみの行方について調べるうちに、大規模なごみ集積場がモザンビークにあることを知って衝撃を受けました。そして、集積場のそばで生活している住民への影響は深刻なのではないかと考え始めました。これが研究の道に進むきっかけです。

ごみ問題は開発途上国、先進国どちらにおいても重要な課題です。消費のあり方の改善、持続可能なデザインの推進、廃棄物の適切な管理、廃棄物削減など課題は山積みです。だからこそ効果的な環境マネジメント、資源の活用、廃棄物管理に関する研究を進め、課題解決に貢献したいと強く願っています。



廃棄物処理の現場視察 (米国テキサス州)

日本の廃棄物処理システムから学ぶこと

モザンビークでは、まだ廃棄物処理システムが確立されていないので、生ごみの埋め立てやごみの収集、処理技術、最終処分方法など日本から学ぶことが多くあります。

特に日本のごみの出し方は細分化かつ組織化され、素晴らしいと感じます。一方で、どんな小さな物も個別にパッケージ化する過剰包装には驚きました。これまで日本で研究を進める中で一番印象的だったのは、ごみ焼却施設から出る処分灰で人工的に作られた埋め立て地を実際に歩いたことです。地域や環境に配慮した廃棄物処理のあり方とその可能性について深く考えるきっかけとなりました。

持続可能な社会の実現へ 東京2020大会に寄せる期待

日本が東京2020大会に向けて、持続可能性に配慮した運営計画を策定している点にも注目しています。政府、企業、市民社会といった関係者全員の理解と合意、参加が大会を成功へと導く鍵となります。大会の成功に向けて、それぞれが自分の役割を的確に把握して能力を発揮するためにも、意識向上や相互理解を促すプラットフォームの確立が必要だと思います。

私にとって「持続可能な社会」とは、個々人が他者からの支援がなくても自立、自活できる社会です。「資源を過剰に消費する社会」と「資源不足に苦しむ社会」という構図から脱し、より平等で自然環境との調和のとれた社会が実現できたらと願っています。



レティシア・ドス・ムチャンゴス

中国の重慶大学で修士 (環境工学)、大阪大学で博士 (環境工学) を取得後、2017年からJSPS (日本学術振興会) の外国人特別研究員としてUNU-IASで研究活動に従事している。国籍はモザンビーク。